



CONTENTS

地域の病院に想う	江川克哉・梶原信之	2
開業苦労ばなし	沼 朝代	4
退任教授あいさつ	岡村富夫・竹内義博・森川茂廣	5
海外からのメッセージ	山原康佑	8
Refresh/趣味の話題	山本文平・茶野徳宏	10
同期会 30年会	塩田哲広・庭川光行・前田士郎	12
20年会	荒木文子・真田 充・藤野和典	14
支部会 関東支部会	湯浅 健・田中絵里子・倉兼 猛・藤木修子・守澤絵里香・高崎水仙・播谷美紀・松尾俊哉・丸田祥平・末永有輝	16
クラブ今昔 合気道部	金子 均・奥田祥伍	20
クラブOB会 スキー部	藤井秀則	22
学生から/クラブ紹介	今村将輝・曾根久智	24
訃報		26
事務局から	総会議事録 ほか	32

地域の病院に想う

滋賀県の地域医療の現場から



長浜赤十字病院 副院長(兼)糖尿病内分泌内科部長

江川 克哉

(医7期生)

私は滋賀医科大学医学部医学科7期生です。卒業と同時に滋賀医科大学第3内科(現在の糖尿病・腎臓・神経内科)に入局し、1年の病棟研修ののち大学院に進みました。その間は主に基礎研究に従事し、終了とともに大阪の市立池田病院で本格的な臨床研修を受けました。ここは中規模の市中病院で、内科患者の多くは消化器疾患であり、上級医から消化器、循環器疾患の指導を受けながら、糖尿病・内分泌疾患に関しては研修医を指導するというポジションでした。その後大学に戻り、米国留学を挟んでしばらくは再び基礎研究に身を置き、滋賀医科大学6C病棟の糖尿病・内分泌主任を経て、現在の長浜赤十字病院に赴任しました。

御存じのとおり、長浜を含む湖北地域は滋賀県でも郡部であり、人口の高齢化が進み、また御多分にもれず医師不足に悩まされております。幸いなことに、小児科や整形外科、精神科は比較的医師数に恵まれていますが、特に内科、外科、麻酔科等は深刻な状況です。新臨

床研修システムの導入に加え、新たに始まる新専門医制度が地方病院に与える影響は計り知れないものがあると考えています。しかし我々のような地方の病院にはその地方の住民の健康を守る使命があり、簡単に倒れるわけにはいきません。また地域医療現場だからこそできることも多くあります。自分の専門分野でリーダーシップをとりながら、一方でいわゆる専門バカにならず(なれず?)幅広い全人的医療が行えます。かかりつけ医のみならず行政や福祉と連携し、湖北地域は全国でも有数の在宅看取りの多い地域となっています。

そこで滋賀医大生や滋賀医大出身の若い先生方にもう一度滋賀県全体の医療について考えていただきたいと思います。滋賀医大で学んだ我々にとって滋賀県は特別な存在であるべきで、滋賀の医療に果たすべき責任があると思います。臨床と研究の両面から滋賀医大を中心として滋賀県全体の医療を盛り上げるべく、是非皆様の力を貸していただければと思います。



勤務医を続けてきて感じる変化



私は1987年に滋賀医大を卒業して旧第三内科に入局し、1993年に市立池田病院に赴任しました。その後2年1ヶ月の草津総合病院勤務を挟んで20年以上市立池田病院に勤務しています。学生時代に「滋賀医大の卒業生は滋賀県に残るべきだ。」と発言していたのに、医局人事とはいえ大阪府内での勤務が長期となってしまいました。ただ、池田市は大阪府の北部に位置しているので、滋賀県から高速道路を使って車で来ると「意外に」滋賀県から近いです。2010年10月に滋賀医大卒で市立池田病院の内科に在籍した医師と、歴代の市立池田病院内科指導医との同窓会を開いた時の画像を載せませんが、19名中11名が滋賀医大の卒業生です。現在も私以外に林和幸先生(腎臓内科:医13期生)と山縣洋介先生(消化器内科:医学部32期生)とが勤務しています。

私が医師になった頃と現在とで変わったことを考えました。がん告知が一般的になりました。在院日数が短縮され、入院の時点から退院準備をするようになりましたが、急性期病院退院後に行く施設も多様化し、在宅療養の支援も増え、退院支援してくれる医師以外のスタッフも増えました。高齢や基礎疾患の重篤さから人工呼吸や胃瘻を差し控えるという選択肢を提示することも増えてきて、そのような「治療の差し控え」に違和感を感じる人は減ってきたようです。最も強く感じるのは超高齢社会の到来です。入院患者さんの多くが後期高齢者となり、100歳以上の患者さんも珍しくありません。ただ、同じ80歳でも昔よりも今の80歳の方が元気な人が多い気がします。

私は一貫して腎臓内科の専門医としての診療を業務の中心としていますが、超高齢社会到来への対応として、2008年

市立池田病院 内科(腎臓内科)主任部長

梶原 信之

(医7期生)



に家庭医療後期研修プログラムを立ち上げました。これは新しい専門医制度における総合診療専門医の研修プログラムに移行してゆくものです。現在若い医師や教育病院に勤務する医師は新しい専門医制度への対応に追われていますが、総合診療専門医は新しい専門医制度の目玉とも言える新しい専門医資格です。多くの健康問題を抱えた高齢者が増えているこの国で、総合診療専門医は特にニーズが高まる専門医と考えています。私と同門の松村一弘特任教授も滋賀医大で総合診療専門医研修プログラムの立ち上げを準備されていますが、研修プログラムはまだまだ少ないと思います。総合診療専門医研修プログラムを立ち上げるには、「総合診療専門研修Ⅰ」の施設基準を満たす診療所または地域の中小病院との連携が必要で、そこがプログラム立ち上げのネックになることが多いようです。市立池田病院の家庭医療後期研修プログラムでは、滋賀医大の学生や臨床研修医の多くが実習をされている雨森正記院長の弓削メディカルクリニック(滋賀家庭医療学センター)で半年間の診療所研修を行っていただいています。

湖医会の皆様これからご協力をお願いします。



内科に在籍した医師(滋賀医大卒)と歴代内科指導医との同窓会



沼眼科

沼 朝代 (医3期生)

開業

苦勞

ばなし



2014年増改築した医院

まずは自己紹介から

—息子は29歳と27歳—

まずは自己紹介から、昭和32年12月生まれ、現在58歳、3期生。

同志社高校から昭和52年4月入学し、学生時代は自宅のあった京都府城陽市から大学まで往復3時間、6年間ずっと通学しました。1・2期生は守山仮校舎へ通学されていましたが、3期生から現在の瀬田校舎になりました。入学当時学生は約300名、大学はまるで家族のような雰囲気でした。

卒業後の事は何も分からない状況で、当然のように母校の眼科医局に入局し、学生時代からの同級生と卒後1年で結婚しました。今は先輩達のモデルが多様で自分の進むべき道を想像することができますが、何しろ先輩達200名中女学生はおよそ20名足らず、情報不足で暗中模索状態でしたが、当時はそれにさえ気が付いていませんでした。二人の息子を出産、同級生の外科医の夫は修行中という事で育児・家事の協力は得られず、全面的に実家を頼って生活していました。

このままでは眼科医としての仕事もまた家庭人としての生活も成り立たないと考えて、臨床研究による学位授与の後、一念発起。当時の職場滋賀病院を辞し、生まれ故郷の城陽市で開業することにしました。平成6年(卒後11年目)36歳の時でした。ちょうど女性医師の離職が最高になる時期です(M字カーブ)。開業した時には長男が小学校2年生、次男は年長でした。滋賀病院勤務から突然生まれ故郷の城陽市で開業、誰も頼る人もなく、たった一人で不安で押しつぶされそうになりながらのスタートでした。難しい症例や手術の必要な患者さんをどうしようと途方に暮れることもありました。

幸いなことに、滋賀医大の京都府内唯一の眼科関連病院(蘇生会総合病院)が伏見区にあったこと、また当時滋賀医大眼科講師の佐々本研二先生が同年春に京都市立病院の眼科部長に就任されたこともあり、患者さんも私も大いに助けられました。奈良(城陽は近い!)の永田眼科には一期生の黒田真一郎先生が永田誠前院長(滋賀医大医療情報部教授 永田啓先生湖医会副会長の御父上)の元、緑内障の修行に励んでおられましたので、緑内障手術はすべて永田眼科に紹介することができまし

た。また第二岡本総合病院(今年5月に宇治市から久御山町に移転し、京都岡本記念病院に改名)には、糖尿病臨床研究の「Okamoto study」で高名な1期生 紀田康雄先生がおられ、特に糖尿病は眼科と関係が深いので、先生は本当に心の支えでした。

以上のように周囲の方々の多方面からのご支援のおかげで、我が診療所の運営も次第に軌道に乗って来ました。子育てがやりやすいようにというのが開業した当初の目的でしたが、この仕事は私に大変合っているらしく、子供が大きくなり、手が離れていくにつれて少しずつ面白い!と感じ、10年少し前から京都府眼科医会理事としての活動もしています。また、宇治久世医師会の仕事で城陽市の介護認定委員の役職にも就いています。色々な先生方と顔を合わせて話をすることで親睦が深まり、医療のネットワークが拡大することで、医師同士の信頼関係とまた患者さんを通しての交流も幅広くできるようになりました。

女性は出産や子育てが医師としてのキャリアアップに妨げになると思われがちですが、人口の半分は女性なので、その経験が人間を扱う医療に反映されない訳がないと自信を持つべきです。特に女性の学生が多い滋賀医大なので、自分の進むべきモデルを探して、それに向かって進んでいただきたいと思っています。医師としての活動のキーワードは「ネットワーク」であると確信しています。



二人の息子は眼科医に 右は長男夫婦 左奥は母 今年のお正月

退任の ごあいさつ

1

1982年5月に薬理学講座の助手として着任し、ほぼ34年間滋賀医大にお世話になりました。私は東京大学で入学試験が唯一実施されなかった昭和44年に大阪市立大学医学部に入学しました。学生紛争のせいで、入学式はもとより最初の2年間はほとんど講義が無く、専門教育が始まる3年生から大学生活が始まりました。卒後の医師国家試験では前年度までの口頭試問形式が廃止され、現行に近い筆記試験として実施されました。何とか合格したものの、何か自分独自の成果を求めて基礎医学(薬理学)の大学院に進みました。当時から医学部卒業後に基礎医学の大学院へ進む人間は希で、60人中1人でしたが、私が4年生の折には何と6人も在籍し、国公立大で最多として記事になりました。

研究対象は一貫して循環薬理学であり、大学院では腎臓からのレニン遊離に関する研究を、留学先のVanderbilt大学稲上研究室では組織レニン-アンジオテンシン系の研究を、滋賀医大では戸田昇先生と共に血管緊張の調節機構を研究しました。成果としては、血管拡張神経がNO作動性神経

“薬”病神の一人より



薬理学講座 教授

岡村 富夫

であることを証明したことや種々の生活習慣病の初期段階に共通して見られる血管内皮細胞障害の成因の一つを明らかにしたことなどでしょうか。日本循環薬理学会の事務局を講座内で運営し、ここ10年余りは会長職を拝命しました。日本薬理学会から名誉会員の推戴を頂いたことから、研究面ではそれなりに評価していただいたと思っています。

教育面では学生諸君に対して、薬理学は単に薬を暗記する学問ではなく、治療薬として選択した理由を説明できる能力を求めて教育してきたつもりです。全て記述式の試験であったために永年“薬”病神の一つにされてきましたが、意図をご理解の上、各々の職域でより良い薬物治療を目指していただきたいと願っています。

運営面では、大学の法人化に伴い設置された評価委員会のまとめ役と三代目医学科長の要職を拝命しました。それぞれ大過なく終えることができましたことは、多くの関係者の努力と協力が有ったことだと改めて感謝いたします。

法人化による経済則の導入と新医師臨床研修制度という大きなシステム変更は基礎医学講座からマンパワーと時間の余裕を奪ったように感じます。滋賀医大において、優れた医療従事者や医学研究者を育てる意味でも再び充実した環境が得られることを期待しております。

最後になりますが、滋賀医大のますますの発展を祈念いたしております。



退任の
ごあいさつ

2

美しい大学

小児科学講座 教授
竹内 義博



小児科学講座のメインキャッチフレーズは「母校への熱い思いを胸に真の全人的医療を実践する未来志向の科」である。平成13年2月1日に滋賀医科大学に奉職させていただいた私は、最初の医局会で3つの基本方針を示した。(1) “Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.” (John F. Kennedy)を引用して、「個人よりも講座、講座よりも大学」という意識を持って欲しい。(2) 奉職する滋賀医科大学に矜持を持って欲しい。(3) 専門性と総合性を両立させ、「子どものために闘う小児科」をモットーにしたい。何処に奉職するにせよ、母校(港)への矜持と感謝の念を持ってない医師は少なくとも小児科医として相応しくないと私は思う。

成長・発達過程にある子どもが対象の小児科は、常にトータルに診る姿勢を堅持しなければならない。学生から研修医、専門医の一貫した教育を担う本学では、小児科の総ての分野をカバーする必要がある。診療においても教育においても専門性と総合性を両立することが求められる。そのため私どもは多大なエネルギーを注いで、講座内に発達障害部門、新生児部門、救急集中治療部門の開設に努め、神経、発達障害、血液・腫瘍、免疫・アレルギー、内分泌・代謝、循環器、腎臓、新生児の各部門を専

門とするスタッフ(助教以上)を確保しながら、卒前卒後教育に携わって来た。最近入局者は減ったが、それでも平成13年以降の入局者総数は80名に上り、ほとんどの小児科医が現在も滋賀県の小児医療を担っている。講座の基本方針とスタッフの熱意が学生や研修医から支持された結果だと自負している。

この厳しい時代にあって、私どもは何をなすべきであろうか。構成員が所属する組織に対して帰属意識が希薄である場合、個人も組織も発展など望むべくもない。「偏狭な愛校心」は大学や講座を衰退させるが、「健全な愛校心」は大学や講座の発展のための原動力であると学生時代から私は固く信じている。「健全な愛校心」とは、自ら青春を過ごし学んだ大学、医師として育ててくれた大学、奉職している大学に対する「熱き思い」に他ならない。本学への熱き思いを持って湖医会の皆様が本学を支えられることを願って止まない。定年退職にあたり本学に奉職させていただいたことに感謝するとともに、滋賀医科大学が真に「美しい大学」となり、高い倫理観と透明性を取り戻して社会から正当な評価を受けることを心から願う。将来、滋賀医科大学が日本の医学界・医療界に富嶽の如く聳える姿を夢見たい。

(平成28年1月)



退任の
ごあいさつ

3

定年を迎えて

—滋賀と京都と比叡山—



基礎看護学講座（形態・生理）
分子神経科学研究センターMR医学研究分野（兼任）教授

森川 茂廣



京都の加茂川堤から見た比叡山

滋賀医科大学には、平成元年の分子神経生物学研究センター開設以来、27年という長きにわたりお世話になりました。センターの教員は、学部教育には関わらずに研究に専念せよというのが原則で、看護学科に移動するまでは、医学科の講義は、物理の1コマでMRの話をさせていただいた程度で、MRの研究で一緒にした方は別として、長期間在籍しているのに、湖医会の皆様とは、ほとんど接点がありませんでした。看護学科に移動して7年になりますが、私の担当は、解剖・生理学とフィジカルアセスメントの講義で、すべて1年生の科目ですので、自分が講義を担当した看護学科16～18期生の3年間の卒業生がようやく湖医会のメンバーとなって働いています。最近は附属病院を歩いていると、顔見知りの若い看護師さんを見かけるようになりました。介護保険の被保険者証が届き、年金受給の歳になった自分にとっては非常に心強く思えます。

私は、京都の西陣の生まれで、大阪に勤務していた数年間を除いてずっと京都で暮らしていましたが、本学に勤務するようになり、20数年前に大津に引っ越してきました。滋賀は水と緑の自然に恵まれた本当にいいところで、琵琶湖花火大会や大津祭りなどの年中行事も間近で楽しみ、今は滋賀県人としてこの地が大いに気に入っています。ただ一つ、比叡山は京都か滋賀かという点が問題です。京都の町中から見ると比叡山は高く聳える山で、小学校の社会科では、京都で一番高い山と習った記憶があり、子供時代は八瀬からケーブルカーとロープウェイで上ると山頂遊園地があるというイメージで当然「京都の山」でした。これに対して大津から見ると、比叡山から奥比叡、延暦寺から横川へと続く山並みのような別の姿となり、滋賀県人にとっては、比叡山といえば延暦寺、霊峰というイメージがあるようです。この話になると大津生まれの妻と二人の子供は、「比叡山は滋賀の山に決まっている」と主張し、私は非常に分が悪くなってしまいます。定年後は少し時間をとって、まだ知らない滋賀を楽しみ、「比叡山は滋賀の山」と心から思える滋賀県人になればいいなと思っています。

長い間お世話になりありがとうございました。



フライブルク大学留学記

Germany

「湖医会」会員の皆様こんにちは。

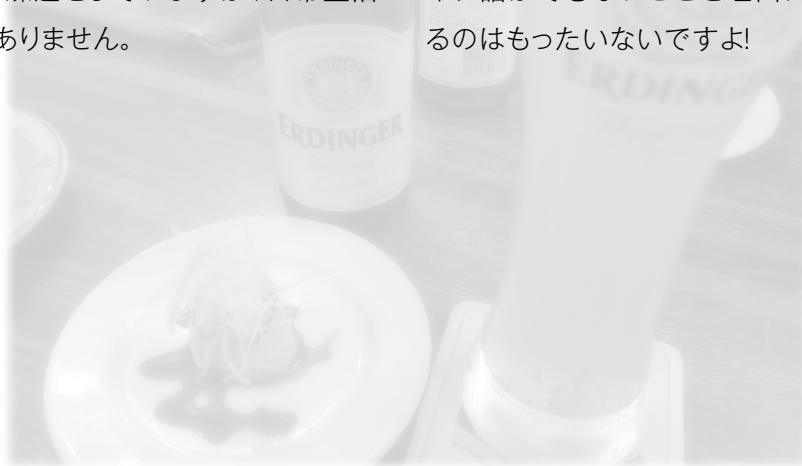
2015年8月よりドイツのアルベルト・ルードヴィッヒ・フライブルク大学医学部へ研究留学をさせていただいている滋賀医大27期生の山原康佑と申します。生活の立ち上げにドタバタしていましたが、ようやく落ち着いてきました。

私の所属するTobias.B Huber研究室は、腎糸球体上皮細胞の研究で有名であり、専従研究者が10人程、我々のような留学組が5人、そして医学部学生が15人程、みんな仲良く助け合いながら働いています。

ラボでのカンファレンスやディスカッションは全て英語で行われます。大変驚いたのが、駅でも市場でも、もちろん大学の食堂でも英語が通じるのです。ドイツは英語教育に力を入れており、ほとんどの人は英語を操ることができます。私はドイツ語を全く話せませんので(大学ではフランス語選択でした。まさかドイツへ留学するとは!)英語で意思疎通をしています。日常生活の場面でも困ることはありません。

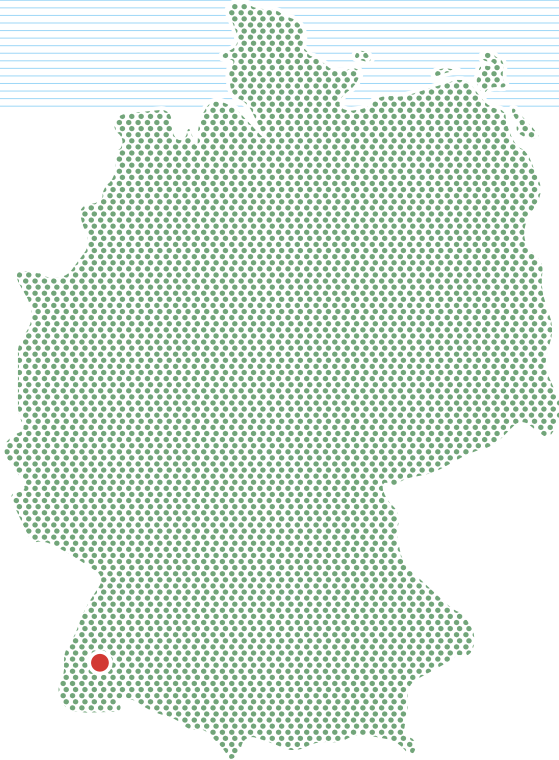
ドイツでは初期臨床研修を終了した時に、「Dr.med.」という学位を授与されるのですが、学位論文がなければ授与されません。そのため、学位取得を希望する医学生たちは、臨床実習へ進む前(日本でいう4-5回生に相当)に休学をした上で実験に参加します。最低半年から数年も休学をするというので驚きです。そもそもこんな教育システムが可能なのも、ドイツの大学は授業料が無料であるということも大きいようです。彼ら医学生の満ち溢れる好奇心とやる気にはこちらも大きな刺激を受けています。

ドイツで研究生活をするメリットは、素晴らしい実験環境、安くておいしいビールやソーセージ、そして歴史的で美しい街並み、これら全てが揃っていることでしょう。仕事に行き詰ったら、旧市街に繰り出して、ドイツビールで乾杯!これでストレスも吹き飛びます。ドイツ語ができないことを理由に、ドイツ留学を躊躇するのはもったいないですよ!



UNIVERSITÄTSKLINIKUM FREIBURG
 Huber lab - Clinical Research Center
 Renal Division - Department of Medicine
 University Hospital Freiburg

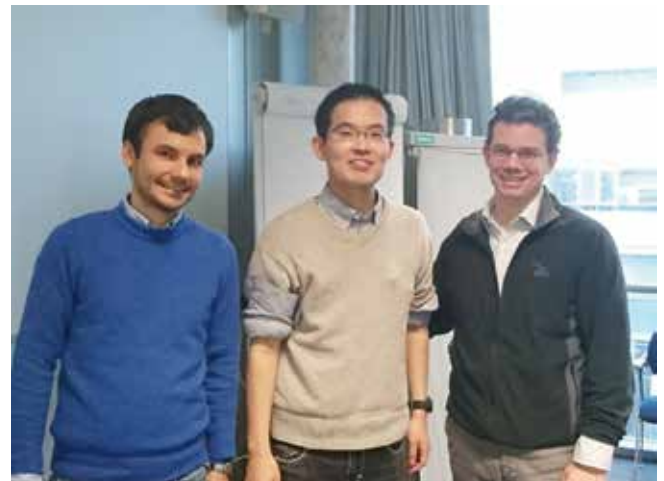
山原 康佑
 (医27期生)



末筆になり恐縮ですが、このような素晴らしい機会を与えてくださりました滋賀医科大学内科学講座内分泌糖尿病・腎臓・神経内科の皆様方や、関係者の方々に深く御礼申し上げます。そして、ミシガン大学で御活躍されている猪木健先生(滋賀医大12期生)からの御紹介で今回の留学が実現しております。この場を借りて重ねて御礼申し上げます。



フライブルグのシンボルであるミュンスターと旧市街



チームリーダーのTillmann・Tobias Huber教授と一緒に

趣 Refresh 題 味の話

公立甲賀病院 皮膚科部長
山本 文平
(医20期生)



私は休日に時々山に登っています。即物的な私は山の自然を楽しむのみでは飽き足らず、自然の一部を切り取って持ち帰るのが好きな似非ナチュラルリストです。そんな私が出会ったのが「鉱物」、もともとは大金持ちになりたくて、学生時代に砂金を掘り始めたのですが、次第にきれいで管理が楽な「宝石」探しにとりつかれてしまいました。宝石の多くは花崗岩にあります。大昔、マグマからのガスが地上に出られず、ゆっくり固まるとその中に水晶を中心として、トパーズ、アクアマリンなどの宝石ができます。実は滋賀県は昔トパーズが多産し、宝石掘りのメッカと言っても過言でない場所なのです。診療現場ではひたすら皮膚を「診て」いる皮膚科医ですが、私は山の皮膚を「診る？」のが得意になってきました。治療はできませんが…。色、凹凸、亀裂の入り方、石の細かさなどで有望な地質かどうか推測できます(視診)。触って崩れ方をみます(触診)。あやしい所をつついてみます(穿刺)。ちょっと掘ってみる(生検)。エコーやCT、MRIが使えないのが残念です。臨床では当たった時に出てくるのは膿ですが、山の中で当たれば少なくとも水晶がどっさり出てきます。

甲賀病院は山が近く、まだ明るいうちに帰れたときは少し山に探索に入っています。気分はインディージョーンズ、ひたすらダニなどの毒虫の襲撃に耐えての探検です。自分が皮膚病にならないようにしないと…。山の地形を「見」ただけで掘るべきところが大体わかる神様のようなハンターも存在するようで、私はまだまだと思い知らされてばかりの日々です。診察現場でも患者さんをぱっと「見」てわかるのはすぐ怒りそうな人かどうかくらいで、それすらよく外れます(T-T)。「家のことをてつだいなさい」という嫁はんや、「川に連れて行け」という子供に翻弄されながらも、人の皮膚科、山の皮膚科ともにレベルアップしていきたいと願っています。



休日も皮膚科!?



採集中



湖南の煙水晶



山の尾根で子供たちと

リレーマラソン

滋賀医科大学臨床検査医学講座 准教授
茶野 徳宏
(医10期生)



左端が筆者

昨年11月の初旬、検査部の技師さんに誘われた。「先生、リレーマラソン一緒に走りませんか？ 5-10名でフルマラソンをリレーにして走るんです。距離が稼げる人が必要で、先生10kmくらい走れますよね。」

毎年が早く感じるようになった人間の記憶とは恐ろしく、よく考えると、学生と駅伝を走ったのは8年ほど前、膝に変性がきて長く走らなくなって2年以上も経っていた。検査部でお世話になって以来、技師さんからの強い要請もほぼ初めて。リレーメンバーさん達もきちんと練習をしている。了解した手前、翻意もしにくく、真面目に練習せざるを得なかった。本番12月5日から逆算しての体調作り、現地の下見走行、膝と相談しながらの持久走能力の改善、等々。

当日は、タイムキーパー、子供のお世話係、アシストメンバーの先生、技師さん、総勢14名と子供達の居る検査部チームテントも設置された。1周2kmの周回コースを交代で走ったが、テントに帰ってくれば、差し入れが用意されていたりして、アウトドアキャンプのようで楽しい。制限時間4時間以内の完走もあやしいチームであった

が、各人が皆、申告以上のタイムで走り、待機中の方がコース各所で応援し合った。3回、総計10km強を走り、最後は脚が攣りかけていたが、繋がってきたタスキの重みでなんとか完走できた。チームは制限時間も切れて、皆、期待以上の笑顔、感謝の気持ちでいっぱいになった。フルマラソンやトライアスロンに比べると、小さなパフォーマンスである。しかし、周回コースを力合わせて、皆で走るリレーマラソンも大きな達成感である。

完走直後、「来年も走りましょう。」と誘われたが、本番1週間前から走りきれるか毎朝胃痛を感じていた筆者は、実は未だ返事していない。もっと計画的に準備しておかないといけな、責任を感じつつ。。。



同期会

タイムトラベル



滋賀県立成人病センター 呼吸器内科長
塩田 哲広
(医5期生)

2月13日13時瀬田駅発の帝産バスに乗って滋賀医大西門前で下車した。福利厚生棟の前で服部君(蛭名総合病院院長)と合流して相見君(滋賀医大解剖学講座准教授)に大学の中を案内してもらおう。様変わりしたキャンパスの中に懐かしい景色が重なり不思議な感覚に襲われる。中でも目を引いたのは福利厚生棟の裏に新しく建てられたクリエイティブモチベーションセンターであった。防音装置が完備された内部では様々な行事やクラブ活動が行われるらしく、2012年ハモネブで決勝進出したアカペラグループの『食後3錠』もこの場所で練習していたとのこと、建物のコンセプトから設計までかわった相見君の話にも熱が入る。

17時30分に会場であるびわ湖ホテルに移動した。懐かしい顔が並ぶ。至る所で話の花が咲く。4名の物故会員に黙祷をささげた後乾杯で会が始る。各自の近況報告の持ち時間はなんと20秒! 世界80か国で食道内視鏡治療を行った小山君(佐久総合医療センター内視鏡内科部長)、大病の報告をしたひと、離婚の報告もないのに再婚の報告をしたひとなど……。スクリーンに映し出される30年前の写真に場内がわく。卒業して30年間色んなことがあったよなあと感傷にしていたら後ろから頭を思いっきりはつら



れた。森河内君(草津総合病院麻酔科部長)である。その後ろには同じラグビー部の国保君(こくほ内科クリニック院長)、前田君(琉球大学医学部教授)の姿が。大学教授になっても変わらない奴らに自然と笑みがこぼれる。楽しいひと時を盛り上げてくれたのが、加藤君(カトウ眼科院長)のフルートと服部(桂)さんのピアノの共演である。本当に楽しいひと時をありがとう。

翌朝は大粒の雨が激しい音を立てて地面を叩きつける音で目を覚ました。今日のゴルフコンペは流れたなと思ったら10年ぶりの再会に天も気をつけてくれたのか、中山君(国際親善総合病院総合内科部長)、木築さん(きづきクリニック院長)の思いが通じたのか、なんとティーオフの時間には雨は上がり、晴れ間がのぞき気温は20度を超えて春のような陽気の中でのゴルフになった。今年64歳になる瀧上さん(たきがみ医院院長)が見事に優勝で2日間のタイムトラベルの幕がおりた。帰り路、何故か原田真二の歌詞を自然に口ずさんでいた。そう丁度僕たちが入学したところによく口ずさんでいたあの曲、『時間旅行のツアーはい〜かが♪♪いかなもの♪♪』次は3年後。どんなツアーになることやら。



5期生

30年同期会に参加して



医療法人弘正会西京都病院 副院長
庭川 光行
(医5期生)

平成28年2月13日、琵琶湖ホテルで卒後30年の同期会が開催され、約50名が集いました。30年はそれなりの時間だろうと覚悟はしていましたが、懐かしい顔、声、高低アクセントや話し方に接すると、まるで学生時代にワーブした様でした。写真撮影の後、物故会員4名に黙祷を捧げ開宴となりました。テーブルを囲んで食事を楽しみながら談笑し、近況や昔話に花が咲きました。相見君が講義で使っているという20秒間ルールの方法で、各出席者が近況を演壇から報告すると、より会話に弾みが付きました。加藤君と桂さんはフルートとピアノの二重奏で再会を祝福してくれました。スクリーンに投影された写真で昔を懐かしみ、撮りたての動画で現在の校内を散策しました。一緒に勉強した仲間に出会えたことで、自分の原点が再確認できました。これからも同期との出会いを大事にしていきたいと思いました。配布された同期生の声を読むと、その様々な運命に感情が交錯しました。次回の同期会では今回参加できなかった方にも是非とも再会したいものです。最後に、多忙の中、素晴らしい同期会を企画進行して下さった相見君と木築さん、そして「湖医会」事務局の方々にお礼申し上げます。

琉球から愛を込めて

～30年同期会に参加して～



琉球大学大学院医学研究科
先進ゲノム検査医学講座 教授
前田 士郎
(医5期生)

2月13日、外来診療を終えて大急ぎで那覇空港に行き、なんとか飛行機に乗ることができました。気温22度で少し汗ばむくらいでしたが、北国(?)の滋賀に向かうので沖縄では異様な(?)厚着をして、いそいそと出かけました。前夜、家内からは「ずいぶん楽しそうね」などと嫌味を言われてしまいました。そう、今日は大学の卒後30年の同窓会です。2時間のフライトで伊丹空港に到着。やっぱり寒い!! 高速バスで京都に向かい、JRで大津についたのは18時を少し過ぎておりました。連絡はしていたもののやっぱり遅刻、沖縄は遠い。メールの着信があり、東京で開業の國保大先生はまだ新幹線の中とのこと。東京も遠いんだなあ。18時30分過ぎに会場に到着すると、丁度相見君の乾杯の御発声でした。誰が誰かという状況でしたが、若き日の写真付きの現状報告という粋な企画で、あっという間に30年前にタイムスリップできました。幹事のみなさん、ありがとう。さらにカトケン&桂さん(旧姓)のハイレベルのアンサンブルまで…。すっかり酔っぱらって、どさくさに紛れてこの原稿依頼を引き受けてしまったようです(全然覚えてません)。そのあと、園部大先生の案内で怪しい(?)カラオケに行きましたが多分お金払ってません。今度払うね。次の同窓会が待ち遠しいです。それでは皆様またの機会を楽しみにしております。沖縄でやってもいいよ!!



同期会

卒後20年同期会に参加して



大西皮フ科形成外科医院 滋賀大津石山院
荒木(中上) 文子
(医15期生)

2月13日に約50名の懐かしい顔ぶれが琵琶湖ホテルに集いました。久々の再会に緊張気味でしたが、不思議と会った途端に学生時代へ戻り、瞬間に話に花が咲きました。入試の受験票と卒業アルバムの顔写真と並んでの恒例の近況報告では、みんな見た目は少しだけ(笑)変わっても、ユーモアたっぷりの中身はそのまま、会場は絶えず爆笑に包まれていました。仕事や家庭の話に共感したり、新しい挑戦や趣味の話には感心し、お子さんの滋賀医大御入学という嬉しい報告があり、その活躍ぶりが甚だTVドラマのモデルになったという華麗なエピソードまで飛び出し、たびたび歓声が沸きました。始終和やかな中で話は尽きず、あっという間の楽しい時間でした。今回は出席できなかった皆様とも、次回お会いできることを願っています。幹事の藤野君、真田君、「湖医会」事務局の皆様、ほんとうにありがとうございました。



金沢医科大学神経内科 准教授
真田 充
(医15期生)

『平成18年2月18日、同期会当日。私は集合時間の1時間前に会場に入ったのですが、既に受付前で数名が談笑していました。久しぶりに見る同級生は、意外にも殆ど変わっていない面々ばかりで、「誰だったかな?」などと思うことは全くありませんでした。皆も再会を喜び、受付前のあちこちで、立ち話…まさに廊下を埋め尽くす勢いでした。集合写真撮影後、同期会開始。恒例の入学時の写真スライドをバックに近況報告する時は、時に悲鳴のような声も聞かれ、会の雰囲気は最高潮でした。』

以上の文章は卒後10年目同期会開催後に記載した、湖都通信への投稿文から抜粋したものです。当時、卒後20年同期会は全く想像できないものでしたが、あっという間にその日が来たという印象です。





平成28年2月13日、卒後20年同期会が前同様琵琶湖ホテルで開催されました。会の雰囲気は卒後10年同期会と全く同じで、10年前にタイムスリップした時間でした。10年前と異なるのは近況報告の際、参加者の様々な歩みが報告され、「卒後20年」を実感した時間でもありました。

最終的に47名(卒後10年目同期会は50名参加)の先生方に御参加頂き、盛況のうちに同期会は終了致しました。聞くところによると、卒後20年同期会は各人の仕事が多忙な時期となるため、最も参加人数が少なくなる会とのこと。そのような中で卒後10年目同期会とほぼ同数御参加頂いたことに対し、心から感謝申し上げる次第です。

最後にこのようなすばらしい同期会が開催できたのも、急遽幹事に御就任頂いた藤野和典先生、および多くの業務を行って頂いた「湖医会」事務局の皆様の御蔭です。この場を借り心より御礼申し上げます。



滋賀医科大学 救急集中治療医学講座

藤野 和典

(医15期生)

卒後20年同期会の代行幹事を終えて

学年幹事である真田先生より「転勤の都合で、同期会の幹事を一緒にやって欲しい」と言われ引き受けた幹事で、当初はあまり乗り気ではありませんでした。しかし直前になって「ところで同期会はいつ?」と言われるようになり調べてみると、連絡網から外れている方や、手紙の返事を忘れていた方が多数いることがわかり、急遽自分で同期生を調べ、確認を取り始めました。すると115名の同期生のうち、すでに開業されている先生が30名弱、海外で働いている先生や、病院で役職についている先生、非常勤として働いている先生方を確認でき、今まであまりかわりのなかった先生方の卒業後のお姿を垣間見ることが出来ました。20年ぶりに見た名前もあり、幹事にならなければずっと知らないままだったと思います。残念ながら全員に出欠の確認は出来ませんでしたが、目の前の業務や雑用に追われる毎日の中、ふと20年前に戻ったかのような不思議な感覚を感じる事が出来ました。最後に、私からの連絡がご迷惑だった方にはこの場をお借りして謝罪致します。申し訳ありませんでした。

関東支部会に参加して

公益財団法人 がん研究会 有明病院 泌尿器科

湯浅 健 (医9期生)

がん研有明病院泌尿器科、9期生の湯浅です。今週は滋賀医大4回生の播谷さんが2日間、見学に来てくれました。婦人科と乳腺科の主に手術見学をして、特に婦人科では、滋賀医大婦人科から当院レジデント研修中の高橋先生が案内いただきました。夜は、こちらも学生時代に当院へ見学に来てくれ、現在は東京大学で研修医をされている北村先生と一緒に3人でミッドタウンにて食事会をいたしました。

僕自身、滋賀医大に入局いたしました。京都、秋田、東京と滋賀から離れて15年と比較的長くなりました。今年は8月22日に恒例の滋賀医大関東支部会、9月5日には同期の今井先生の整形外科教授就任会、そして今回の学生さん見学と、1か月の間に3度も母校を思い出す機会となりました。今年、関東支部会、講演は佐久総合病院内視鏡内科の小山恒夫先生でした。消化器内視鏡の第一人者で、国内だけにとどまらず海外でも匠の技を伝授に行かれているという、大変魅力的な貴重な講演を聞かせていただきました。多く来ていただいた学生さんたちにとっても、僕たち他分野で働く医師にとっても大変良い刺激になりました。来年はまたどんな講演を聞かせてもらえるのか楽しみにしています。



JMA海老名メディカルプラザ 放射線科

田中 絵里子 (医18期生)

8月22日土曜日、品川プリンスホテルで行われた第16回関東支部会に参加いたしました。現在私の勤務しているグループ病院の院長の服部智任先生が(偶然に!!)滋賀医大出身でいらっしゃる関係で、お誘いをいただき、今回初めての参加でした。都合により途中からの参加となりましたが、ご報告させていただきます。

ご講演された佐久総合病院の小山恒男先生のお話は素晴らしく、上部消化管腫瘍に対する内視鏡治療への情熱とエネルギーなご活動の一端を垣間見させていただきました。現在、消化器科で当然のように行われているESDという内視鏡治療を始められたのが、滋賀医大の大先輩と知って、まず、とても驚きました。それぞれの患者さんにとって最良の治療を模索された結果としてESDをはじめられ、必要に迫られて器具を発明されたお話、そして、その手技を、長野の地から、日本全国、そして、世界に広

げていかれたお話は非常にダイナミックで、まるで、NHKのドキュメンタリー番組を見るようでした。また、病理を大切にされ、現在でも全国の内視鏡医を目指す先生方と一緒に病理との対応を重視した教育カンファレンスをされているお話も非常に感銘を受けました。

関東支部会は、卒後関東地区での勤務を希望する学生さんとの交流も大きな意義の一つのことで、たくさんの学生さんが来ておられました。参加された学生さんの多くが企業や他の大学を経験されているのが印象的でした。関東で勤務していても他の病院の勤務状況を熟知しているわけではなく、あまりお役に立てなかったのが残念です。また、懇親会では久々に同級生に会い、旧交を温めることができました。十数年ぶりの再会でしたが、すぐに学生時代に戻るものですね!初めての参加で不安でしたが、案ずるより産むが易しで、いろいろな先生方のお話も伺うことができ、和やかで楽しい時間を過ごすことができました。来られたことのない先生も、是非来年いかがですか?



支部会

●医学科5年 倉兼 猛

今回初めて関東支部会に参加させていただきました。最初に佐久総合病院の小山恒男先生によるご発表では新しい治療法やそれに使用される機器のお話があり、私自身が滋賀医大に学士入学する前は医療機器メーカーで開発プロセスに携わっていたこともあり、大変興味深い話でした。全国、そして海外でも賞賛されている先生が滋賀医大OBにいらっしゃるということが分かり、ここで学ぶ新たなモチベーションになりました。その後の懇親会では美味しい中華料理をいただきながら、小山先生と直接お話する機会があったり、その他開業医や勤務医、医系技官の先生まで多種多様な道に進まれてるOB・OGのお話を伺うことができ、普段の学校生活ではあまり聞けない話もあり今後のキャリアを考える上で大変参考になりました。

最後にこのような素晴らしい会にお招きいただき「湖医会」関東支部の諸先輩方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

●医学科5年 藤木 修子

今回は、「湖医会」関東支部会に参加させていただき、ありがとうございました。関東でご活躍されている先輩方のお話をたくさん伺うことができ、非常に貴重な体験となりました。とくに、滋賀医大5期生の小山先生の内視鏡についての講演は、とても興味深く、これから勉強を進めていくためのモチベーションとなりました。思っていたよりも学年の離れた先生方とお話することで、目先の就職先だけでなく卒後何十年と自分の人生を考える上でも参考になりました。また、日本中で自分の母校の先生方が活躍されていることを知り、安心しました。あまりお会いすることのない同じ部活のOB、OGの先生方に会うこともできました。

またこのような機会があれば積極的に参加させていただこうと思っています。ありがとうございました。

●医学科5年 守澤 絵里香

先日は関東支部会に参加させていただき、誠にありがとうございました。アットホームな雰囲気でごくばらんに先輩方とお話させていただき、様々な刺激を受け、将来への展望が開けたように思います。1次会だけではもの足りなく思いましたので、是非2次会、3次会とあればいいなと思いました。小山先生の講演会もとても素晴らしかったです。最初は地域医療を学ばれていた先生が自らの腕で世界へと飛び立たれた様子に感銘を受けました。地域医療というと若干範囲が狭いようなイメージを持っていましたが、そんなことはなく、自分の情熱次第でいくらでも道は開ける、ということを感じました。来年もまた参加させていただきたいので、どうぞよろしく願いいたします。



関東支部会に参加して

●医学科4年 高崎 水仙

この度、「湖医会」関東支部会に参加させていただきました。昨年度初めて参加させていただいた際、とても緊張したものの、ご親切にも多くの先輩方に優しくお声かけ頂き、今後是非参加したいと考えておりましたが、昨年度と同様に皆様に温かく迎えていただき、非常に楽しくも有意義な時間を過ごすことができました。講演会では、佐久総合病院佐久医療センターの小山恒男先生より、内視鏡による上部消化管の最先端の診断及び治療についてのお話を拝聴しました。内視鏡技術の目覚ましい進歩に感銘を受けるとともに、世界でご活躍される小山先生のお姿から大きな刺激をいただきました。最後になりますが、このような素晴らしい会に参加する機会を頂戴出来たことを深く感謝申し上げます。来年以降も是非参加させていただきたいです。

●医学科4年 播谷 美紀

この度は関東支部会に参加させて頂きありがとうございました。去年の関東支部会でお会いした先生方に顔を覚えていただいていた嬉しかったです。講演会では最前線の上部消化管の内視鏡診断と治療を教えていただき勉強になりました。懇親会では学生時のアドバイスや臨床現場の実態など貴重なお話しをしていただき大変感謝しております。沢山の刺激をいただくことができました。日々精進して参ります。

●医学科4年 松尾 俊哉

今回初めて参加させていただきました。参加した学生のうち、私だけが関西出身ということですぐに覚えていただき、先輩方々とさまざまな話をさせていただきました。小山先生の講演を聞き、臨床一筋で世界から声のかかる医師でおられることがわかり、研究以外にも世界で活躍する方法があることがわかり、新たな希望を見た気がしました。研修先で、大学を選ぶのか、市中病院を選ぶのかどう点を考えればよいか、かなり丁寧に話を聞くことができ、有意義な時間でした。ありがとうございました。

●医学科4年 丸田 祥平

私は今回初めて関東支部会に参加しました。たくさんの滋賀医科大学出身の先輩方と知り合うことができました。内視鏡手術で世界的に活躍されている小山先生の講演は非常に素晴らしかったです。そのような先輩の後に続くべく自分も日々の勉強にも熱が入っております。また講演後の立食パーティーでも、幅広い年代の先生方とお話ができる機会があり、研修病院選びなどについても非常に親身に相談に乗っていただきました。中でも、自分の母校でもある慶応大学の付属病院出身である河合先生から病院の詳細について詳しく教えていただき、興味をもちました。先輩方は学生に対しても暖かく迎えてくれます。また来年も是非参加をしたいと思っております。

●医学科1年 末永 有輝

先日は、「湖医会」関東支部会に参加させていただき、ありがとうございました。1回生の私にとって、医師としてご活躍中の先生方と直接お話しさせていただく機会は少なく、とても貴重な機会でした。関東支部会に参加して、滋賀医科大学を卒業して関東で医師としてご活躍中の先輩方も多いことを知り、将来の一つの選択肢として考えようと思いました。普段は様々な場所で活躍する同窓生が会する場合は、お互いを尊重する雰囲気であり、後輩の私にも声をかけてくださり、本当に充実した時間が過ごせました。ありがとうございました。

関東支部会から「湖医会」に次の物品を寄贈いただきました。御礼申し上げます。

●プロジェクター ACER H6510BD DLP 1台



合気道部



「我が合気道部への思い」…

立ち上げた頃とそして今と

初代主将・合気道部師範 金子 均
(医7期生)

合気道部の創部は1981年ですから、今年で35年になります。その間50名を超える有段者が生まれました。現在30名近い部員が所属して10名余の有段者がいるという、少人数の医学部としては立派な武道部になったと思っております。合気道部のOBOGがこれを聞いたならば、さぞ嬉しく、また懐かしく思うことでしょう。

創部は、唯一の経験者であった小生の入学時に「この指止まれ(7名集合)」で始まりました。4月に同好会が発足し、12月に部に昇格しました。その頃の医大は、初めて卒業生を出した時で「医大生の就職口はどうなるの?!」が話題になったほどの初々しい医大青春期でもありました。大学武道館が出来たばかりで大学の支援も小さくありませんでした。

部昇格から暫くして、数人が同時に映る大きな姿見(木刀振り用)、他大学交流稽古時に用いる大太鼓、そして真新しい100畳敷の稽古場と、次々に整いました。こうした恵まれた環境整備に対する学生課の温かい心遣いや、初代顧問副学長・恩師故佐野利勝先生のご尽力には今も感謝深甚の思いで一杯です。

その後の活躍は、1986年西医体の団体・個人最優秀賞、1999年同個人有段の部準優秀賞、西医療体団体の部最優秀賞、2007年西医療体団体・個人準優秀賞など、今日に至るまで記憶に残る活躍を続けております。(ちなみに合気道は「争わない武道」なので試合がありません。従って医学生の大会では演武で優劣を評価します。その極限は、自然体にして争わずして勝つ「自然体護身」です。またその「対話の武道」としての独特の深みと温かみは、医療に携わる者には有効な財産となることと思っております。)

指導陣は、創部以来ずっと(公財)大阪合気会傘下にあって、7~8年前からは大阪本部からの出張師範(現在は廣見剛先生)をお願いしておりますが、加えてOB師範として小生〔近江合気館(2005年設立)館長、師範6段〕が、またその仲間の近江合気館瀬田道場長平野誠先生も、学長より指導師範として任じられております。こうして、時折訪れるOBOG諸君と共に楽しく稽古を続けながら、医大同窓生軍団のひとりとして草の根支援を心掛け、今後一層のクラブ活動そして医大の発展を心から祈念している次第です。〔皆様に感謝。拝〕



合気道部の活動



主将 奥田 祥伍 (医学科3年)

我々滋賀医科大学合気道部は、現在一回生から六回生まで全員で30名程が所属しており、毎週火曜日と金曜日に活動しております。我々の部活の特徴として一つの流派だけでなく二つの流派の合気道を稽古していることが挙げられます。火曜日には大阪合気会の廣見剛師範に稽古をつけていただき、金曜日には近江合気館瀬田道場長の平野誠先生に稽古をつけていただきながら、日々合気道に取り組んでおります。また、月に一度我々の初代主将である近江合気会師範金子均先生にも稽古をつけていただいております。部活に所属している者の多くが初めは合気道未経験者ですが、基礎から稽古をし、皆で楽しく合気道に取り組んでおります。

合気道競技には、ほかのスポーツなどという勝ち負けが存在せず、大会などでは演武を行い、その正確さ、美しさ、力強さなどを披露します。我々の部活でも西医体という関西の大きな大会を一つの目標に日々合気道に取り組んでおります。多くのOB・OGの方々、先生方に支えていただいているということをお忘れず、これからも合気道に励んでいきたいと思っております。



クラブ OB会

福井赤十字病院 外科部長
藤井 秀則
(医5期生)



いつまでもやんちゃなスキー部OB還暦の会

私は5期生の藤井です。卒後30年を迎えます。

学生時代は、夏はバレー部、冬はスキー部でした。

スキー部にはいわゆるやんちゃな先輩方が多く、特に1期生、2期生、そして当時、公私ともに我々の面倒を見ていただいた保健管理学講座の山川正信先生には大変お世話になりました。

8期生の梅田朋子先生の言葉を借りれば「たばこをぶかぶか吸いながら、セクハラ発言満載の武勇伝は、学生時代はいつも「おとなー」と思っていました」ということになるのですが……その、先生方も無事に?還暦を迎えることになりました。

山川正信先生の還暦お祝いは2009年6月27日に京都で先斗町の舞妓さん芸子さんも駆けつけて盛大に行われました(写真1、2)。1期生の田中证明先生のお祝いは

2010年12月3日に、なぜかソウルで行われました。参加者の半数が田中先生の韓国のご友人で、我々日本からは一泊二日の飲みまくり弾丸ツアーでした(写真3)。

そして今回は、2期生の加藤正二郎先生と中澤拓也先生の還暦お祝いの会が2015年10月17日に京都で行われました。

個人的には加藤、中澤両先生は私を無理やり?スキー部に入れた張本人で、当時、加藤先生からはスキーブーツを、中澤先生からはスキー板を譲り受け、京都のビックホリイケという店に拉致されて連れて行かれてウエアなどを買わされました。もちろんこのことは今でも大変感謝しています(笑)。

今回は4期生の毛受先生が幹事の労を取ってくださり、両人のお祝いには学生さんも含め17人が駆け付け昔



(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真4)

話に花が咲き大変盛り上がりました。

参加者各自の近況なども報告されましたが一言でいえば「みんなやんちゃなまま」でした(写真4)。

報告の中で加藤正二郎先生が趣味で落語をされているとのこと。それではということで一席お願いすることになりました。加藤先生いわく還暦を前に天職を見つけたということで落語を始めたそうです。理由は100ぐらいあるそうですが、落語はボケ予防にはいいのではとのことでした。セリフを覚えて練習しなければいけない。すなわちバカじゃできない。でも利口な人はしません(ここは笑うところだそうです)。ということでお噺を始めました。芸名はブラザ亭一夜、演目は「寿限無」で縁起のいい名前をネタに

した加藤先生の軽快な落語で一同、大笑いいたしました。終わった後は、会場大拍手でプロの落語家より面白く、素人はだしとはまさにこのことでした(写真5)。

中澤先生は今も滋賀医大の脳神経外科でご活躍とのお話を聞いて、参加者一同誇らしい思いをいたしました(写真6)。中澤先生は加藤先生の落語を聞いて「オレもなにか始めようかな。」と話されていました。何を始められるか楽しみです。

以上、今回は簡単ですが、スキー部の還暦の会のご報告をさせていただきました。

楽しい一次会の後は、次の再会を楽しみにしながら先斗町の夜が更けていきました(写真7)。



(写真5)



(写真6)



(写真7)



写真部

部長 今村 将輝 (医学科2年)

写真部は休部状態でしたが、平成26年に私が活動を再開させました。最初は道具もノウハウもなく、また私が当時1回生だったこともあり苦勞もありましたが、写真部の顧問でありさらに滋賀医大写真部OBである永田先生に様々な面でご協力いただきまして、現在9名の部員で活動しております。

活動のメインは若鮎祭です。部員の個性が光る、思い思いの写真を持ち寄って展示しております。まだ2回の開催ですが昨年も今年もご好評をいただきまして大変よいものになったと感じております。その他の活動としては不定期に撮影会を行うことその他、依頼をいただき撮影に赴くこともあります。過去に大学案内のパンフレット写真撮影、医局の写真撮影、ぬいぐるみ病院さんの活動の撮影などを行いまし

た。撮影会は過去に高台寺、永源寺の紅葉、近江八幡など景色の良いところに出かけました。昨年に大学から一眼レフを支給していただいたので、初心者にも気軽に本格的な撮影ができるようになりました。また昨年は法医学教室主催の写真勉強会にも参加させていただきました。白紙の状態であった写真部ですが多くの方々のご協力により実りある活動となっていることを実感しております。



しがぬいぐるみ病院

曾根 久智 (医学科4年)

～「病院って?」「からだって?」～

「しがぬいぐるみ病院」は、2014年度に滋賀医科大学の学生有志で立ち上げました。「ぬいぐるみ病院」は、子どもたちに医療や健康についてもっと身近に感じてもらうように働きかける活動です。もともとはドイツ発祥の活動で、IFMSA-Japan(日本国際医学生連盟)の「公衆衛生に関する委員会」のプロジェクトの一つを構成しています。今日では滋賀医科大学も含め全国37大学にまで広がっています。

「しがぬいぐるみ病院」では保育園などに学生が伺い、模擬診察と保健教育を行います。

模擬診察では、ぬいぐるみを患者さんに見立てて、学生と子どもがペアになって治していく、いわゆる「お医者さんごっこ」をします。その過程で聴診器や体温計、舌圧子といった道具に触れたり理解したりすることで、病院に行く意味を知ります。そして知らないことから生じる医療の恐怖心の軽減を目指しています。



保健教育では、子どもたちの前で、保健や健康に関する内容の劇や紙芝居を行います。歌やゲーム、劇を通して子どもたちが楽しく学びながら、健康に関心を持てるよう働きかけます。保育園の先生などと相談しながら、食育、手洗いうがい、歯磨きなどといったテーマを決めています。

「しがぬいぐるみ病院」は年に3回～4回ほど、夏休みと春休みを利用して保育園などで活動をしています。これまでに6回の実施を行いました。これまでいろんな子どもたちに出会ってきました。どの子どもも一生懸命で、私達学生側もさらに熱が入ります。そして学生も子どもたちから、コミュニケーションのとり方や、歯磨きや手洗いなど、きちんと教えるために学び直したりするなど様々なことを学ばせていただいています。

立ち上げたばかりの活動ですが、少しでも地域の方々や子どもたちと有意義な活動にしていきたいと思っています。温かく見守っていただきますようよろしくお願いいたします。



模擬診察の様子



保健教育の様子



謹んで哀悼の意を表します。

訃報

- 平成27年5月6日 森 宏明 (医5期生)
- 平成27年8月28日 中土井 晃子 (医34期生)
- 平成27年12月27日 真弓 健治 (医10期生)

2015年度「湖医会」総会 議事録



日時／平成27年10月24日(土) 14:00～15:20

場所／基礎実習棟B講義室

議 題

- ① '14事業報告及び'14決算について
○原案(資料1-1、1-2)どおり承認された。
- ② '15事業計画及び'15予算について
○原案(資料2-1、2-2)どおり承認された。
- ③ その他
○大学(学生・学友)会館の構想について
大学が建設を検討している大学(学生・学友)会館(仮称)の構想について、
これまでの状況について報告があった。

※各資料は「湖医会」HPを参照

年会費について

医学科卒業会員

会費の割引…自動引き落とし(口座振替・VISAカード)のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

会費の免除…40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)は、以後の会費は免除となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の自動引き落とし



口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。
なお、便利な口座引き落としの利用をご希望の方は
事務局までご連絡ください。

名前・住所・勤務先・メールアドレス等が変更になった場合は、
メールまたはファクスで事務局までご連絡ください。

表紙の写真：ヒポクラテスの木・基礎研究棟